

東京福祉大学

2025年度 Special 奨学生選抜（12月14日）

現代の国語・言語文化 試験問題

（制限時間60分）

- ※試験開始の合図があるまで、開いてはいけません。
- ※この問題用紙は試験終了後、持ち帰ってください。

受験番号

氏名

2025年度 Special 奨学生選抜（12月14日）

現代の国語・言語文化

※問題は次のページからです。

【問題】次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

津浪と人間

昭和八年三月三日の早朝に、東北日本の太平洋岸に津浪が襲来*して、沿岸の小都市村落を片端から薙ぎ倒し洗い流し、そうして多数の人命とタガク^①の財物を奪い去った。明治二十九年六月十五日の同地方に起こったいわゆる「三陸大津浪」*とほぼ同様な自然現象が、約満三十七年後の今日再び繰り返されたのである。

同じような現象は、歴史に残っているだけでも、過去において何遍となく繰り返されている。歴史に記録されていないものがおそらくそれ以上に多数にあったであろうと思われる。現在の地震学上から判断される限り、同じ事は未来においても何度となく繰り返されるであろうということである。

こんなにたびたび繰り返される自然現象ならば、当該地方の住民は、疾の昔に何かしら相当な対策を考えてこれに備え、災害を未然に防ぐことが出来ていてもよさそうに思われる。これは、この際誰しもそう思うことであろうが、それが実際はなかなかそうならないというのがこの人間界の人間的な自然現象であるように見える。

学者の立場からは通例次のように云われるらしい。「この地方に数十年ごとに津浪の起こるのは既定^bの事実である。それなのにこれに備うる事もせず、また強い地震の後には津浪の来る恐れがあるというくらいの見やすい道理もわきまえずに、うかうかしているというのはそもそも不用意千万なことである。」

しかしまた、罹災者の側に云わせれば、また次のような申し分がある。「それほど分かっている事なら、何故津浪の前に間に合うように警告を与えてくれないのか。正確な時日に予報できないまでも、もうそろそろアブない^②と思つたら、もう少し前にそう云つてくれてもいいではないか、今まで黙っていて、災害のあつた後に急にそんなことを云うのはひどい。」

ア、学者の方では「それはもう十年も二十年も前に疾に警告を与えてあるのに、それに注意しないからいけない」という。するとまた、罹災民は「二十年も前のことなどこのせち辛い世の中でとても覚えてはいられない」という。これはどちらの云い分にも道理がある。つまり、これが人間界の「現象」なのである。

災害直後時を移さず政府各方面の官吏^d、各新聞記者各方面の学者が駆け付けてシヨウサイ^③な調査をする。そうして周到な津浪災害予防案が考究され、発表され、その実行が奨励されるであろう。

イ、それからさらに三十七年経つたとする。その時には、今度の津浪を調べた役人、学者、新聞記者はたいていもう故人となつているか、さもなくとも世間からは隠退している。そうして、今回の津浪の時に働き盛り分別^e盛りであつた当該地方の人々も同様である。そうして災害当時まだ物心のつくか付かぬであつた人達が、その今から三十七年後の地方の中堅人士となつているのである。三十七年と云えばたいして長くも聞こえないが、日数にすれば一万三千五百五日である。その間に朝日夕日は一万三千五百五回ずつ平和な浜辺の平均水準線に近い波打ち際を照らすのである。津浪に懲りて、はじめは高いところだけに住居を移していても、五年たち、十年たち、十五年二十年とたつ間には、やはりいつともなく低いところを求めて人口は移つて行くであろう。ウ、運命の一万数千日の終わりの日が忍びやかに近づくのである。鉄砲の音に驚いて立つた海猫が、いつの間にかまた寄つて来るのと本質的の区別はないのである。

これが、二年、三年、あるいは五年に一回はきつと十数メートルの高波が襲つて来るのであつたら、津浪はもう天変でも地異でもなくなるであろう。

風雪というものを知らない国があつたとする、年中気温が摂氏二十五度を下がる事がなかったとする。それがおおよそ百年に一遍くらいちよつとしたフブキ^④があつたとすると、それはその国には非常な天災であつて、この災害はおそらく我が邦の津浪に劣らぬものとなるであろう。何故かと云えば、風のない国の屋根はたいてい少しの風にも吹き飛ばされるように出来ていであろうし、冬の用意のない国の人は、雪が降れば凍えるに相違ないからであ

る。それほど極端な場合を考えなくてもよい。いわゆる颱風たいふうなるものが三十年五十年、すなわち日本家屋の保存期限と同じ程度の年数をへだてて襲来するのだったら結果は同様であろう。

夜というものが二十四時間ごとに繰り返されるからよいが、約五十年に一度、エ不定期に突然に夜が廻りめぐ合わせてくるのであったら、その時に如何いかなる事柄が起こるであろうか。おそらく名状の出来ない混乱が生じるであろう。そうしてやはり人命財産の著しいソ⑤ンシツが起こらないとは限らない。

さて、個人が頼りにならないとすれば、政府の法令によつて永久的の対策を設けることは出来ないものかと考えてみる。オ、国は永続しても政府の役人は百年の後には必ず入れ代わっている。役人が代わる間には法令も時々
は代わる恐れがある。その法令が、無事な一万何千日間の生活にはなはだ不便なものである場合はなおさうである。

注…通常は、「津波」と表記されることが多いが、「津浪」と表記されることもある。

*東北日本の太平洋岸に津浪が襲来……………「昭和三陸地震（M八・一）」を指す。死者・行方不明者約三千人の被害を出した。

*「三陸大津浪」……………「明治三陸地震（M八・二）」によつて引き起こされた大津波。二万人を超す死者を出した。

出典…寺田 寅彦著、山折 哲雄編『天災と日本人―寺田寅彦随筆選』K A D O K A W A 二〇一一年（一部改変）

問一 本文中の傍線①～⑤の片仮名を漢字に直しなさい。

- ① タガク
- ② アブ（ない）
- ③ ショウサイ
- ④ フブキ
- ⑤ ソンシツ

問二 本文中の空欄ア～オに入る最も適切な接続語を、次の語群①～⑤から選んで番号で答えなさい。ただし、同じ語を二度以上使つてはならない。

- 語群… ① さて
- ② ところが
- ③ そうして
- ④ すると
- ⑤ しかも

問三 文中の……線 a ～ e の意味として適切なものを下の㉠～㉧から選び記号で答えなさい。

- a 疾の昔
- b 既定
- c 罹災
- d 官吏
- e 分別盛り

- ㉠ 災害を受けること。
- ㉡ 役人。
- ㉢ 成人して豊かな人生経験を持ち、物事の道理が最もよくわかる年頃。
- ㉣ 大事な物を保管しているところ。
- ㉤ すでに定まっていること。
- ㉥ とつくに過ぎ去った昔。

問四 本文の内容と合致していないものを次の①～⑤の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- ① 津浪という現象は、歴史に残っているだけでも、何遍となく繰り返されてきた。
- ② 繰り返される自然現象に備えて住民は相当な対策を備え、防ぐことができるようになってきた。
- ③ 学者の立場は、「数十年ごとに津浪の起こるのは既定の事実なのだから、備えないのは、不用意千万である。」である。
- ④ 罹災者の云い分は「津浪の前に間に合うように警告すべきなのに、災害にあつてから云うのはひどい。」である。
- ⑤ 学者の立場と罹災者の云い分のどちらにも道理があることが人間的自然現象である。

問五 本文中の二重傍線の「人間的自然現象」について、あなたはどのように考えますか。本文の内容に触れながら、あなたの考えを四〇〇字から六〇〇字で述べなさい。